

小学校教師座談会

子どもたちの「読むこと」は、今

今、国語教室の中で、「読むこと」の学習はどのように行われているのでしょうか。子どもたちの「読み」の姿は、変わってきているのでしょうか。長年国語の指導に携わってこられた二人の先生方に、お話を伺いました。

子どもたちは、今

先日、昨年実施された学力テストの結果についての分析が発表されましたが、先生方は毎日教室で子どもたちを「覽」になって、どんなふうに感じていらっしやいますか。
T：先日の結果報告でも触れられていましたが、考えて表現するという力が落ちてきているというのは感じますね。特に状況をとらえた文章表現ができていないと思

ます。「だれに」という相手意識、「何を」という目的意識についてのはわりと理解して書けるのだけれども、その場面の状況をきっちりととらえられない。場の意識が弱いように思います。

具体的には、どういふことですか。

T：例えば、学区域にお住まいのおじいちゃんおばあちゃんに招待状を書くことです。書くのに必要なことは一応書けるようになるのですが、添える資料として必要なのは、例えば学校までの地図なのか、校舎内の案内図なのか、そこまでのイメージが浮かばない。考えていないということでしょうか。本当の意味での相手意識についてのがなくなって、用意されたものを用意されたように書くに留まってしまうのです。

実際に、自分で判断をともなうて物事をするっていうことができてないということですね。

M：わたしもそう思います。子どもたちの判断する力とか、考える力が育っていないように思います。それから、結果報告では漢字力という点では低下傾向は見られないということでしたが、語彙力という点では落ちてきているような気がします。

S：例えば、「大造じいさんとガン」を学習していても今の子どもたちからは短絡的で表面的な言葉しか出てこない立つてるとちよつと暗いからどいてくれない?と相手に分かる言葉でちゃんと伝えれば「あ、ごめんね」となるし、また逆に、相手の話をちゃんと聞けば分かることもあるんじゃないかと思えます。だから子どもたちには、「もつちよつと分かるように説明してあげたらいいよね。相手の話もきちんと聞こうね。」って言うています。

T：新聞や雑誌で、精神科医なども言っていますが、子どもたちは、自分の思いや願いを言葉で表現する能力が育ちにくい状況があるのではないかといいことですね。反社会的な行為や不登校など、子どもをめぐるさまざまな問題の根っこの中に、そこにもそれがあるように感じます。

M：そうですね。生活言語が貧困になっているというのがありませんね。言葉にできないものがたまっている



ないという印象なんです。文章を読んで何か感じているはずなのに、「大造じいさんは頑張ったのに悔しかっただろう。」で終わっちゃうんです。そうじゃなくって、「あれだけ念入りに準備をして、本当に今か今かと待っていたのに、それがここで逃げられちゃって、どんなに悔しかっただろう。」とか、「大造じいさんとガンはお互い心が通じ合ってるんじゃないか?」とか、心象風景を表すような具体的な言葉があってもいいんじゃないかと思つたんです。同じ教材を二十年前に扱ったときは、「悔しい」「っていつ言葉がなくても、その子が、一生懸命考えて読んだと分かるなにかの言葉が書かれたり、発言として出てきたりしていました。最近はそのような言葉がほとんど聞かれないんです。感じていることと言葉が結びついていないというんでしょうか。語彙力が落ちて

いるんだなというのが実感です。
T：自分の感情を表現するときも、「うざい」「とか」「きれい」「とかではなく、もう少し別の言葉で表現してほしいと思つたんです。

S：言葉で表現する力、状況あるいは自分の気持ちを正確に表現する力ですね。「ねえ、触ると痛いよ。」って言えば済むことを、「うっせーな。」ってやるから「なんだよ。」「こたつてしまつたんです。そつてはなくて、あの、そ

なんかむかむかする、いらいらする、という中で突発的にいろいろなことが起きているということがあります。だから、普通の子がなんでこんなことをと思うけど、やっぱり適切な言葉で表現できてないんだろうと思えますし、相手の言葉を聞くこともできてないんだろうと思つのです。

そんななかで、言葉を獲得する大きな力となるのが教科書の読み物だと思えます。教科書で読み物教材が減っていくというのはね。危機感をひしひしと感じます。教科書は、子どもたちがそこに書かれた内容を共有し、交流して豊かな言語感覚を育てる大切な場です。やはりまず、言葉の獲得としての「読み」、心情を豊かに育てるための「読み」を子どもにも与え、獲得させていくということが必要なのではないのでしょうか。

T: その危機感が世間一般にもすごくあって、読書が強くクローズアップされてきているんだと思えます。国語の指導でいちばん大切なのは、豊かな言語生活ということになるんじゃないでしょうか。将来にわたって豊かな言語生活を送るためには、やっぱり、先人から学ぶということもあると思います。そう考えたら、読書から学ぶことはすごく大きいわけで、まずは「読むこと」から始めるといつことになると思います。

ばいお話を読んでもらって育ってきている子どもが、一年の「くじらぐも」では、「雲の上から、何が見えただろうね、みんな言ってみよう」と言っていて、考えたり想像したりしたことを言い合っていて、楽しむことができるんです。ところが、小さなころからゲームばかりやって、まあ、ゲームも結構だけれど、実際の経験が乏しかったり、想像を巡らすという経験が少ないと、「くじらぐも」も「なんだかわかんねえや。」って言いながらただ読んで終わってしまつ、そういう子どもではまったく持っている言語的素質が違つてくると思います。

M: そうですね。だから「読む」ときに注意しなければいけないことは、詳細な読解が否定されたからといって、ストーリーを追つてそれで終わりではいけないということなんです。実はストーリーだつて複線があったりするわけです。なんで「わらぐつの中の神様」の最初に、マサエとおばあちゃんとの会話が出てくるのだろう。そのわらぐつに対する固定的な観念とか、おばあちゃんなんか温かくていいもんだとつて言ってる、そういうものをしっかりと読んでから中を読んでいくと、「ああそうか、確かにわらぐつってみともないかもしれない、かっこは悪いかもしれない。でもそれを、ほんとうに一生命命編んだ人の心つて分かるんだね。」っていつぶつになつてい

読み浸る、読み味わうこと

国語の教室では、「読むこと」「学習」についてはいろいろ工夫されているところだと思えますが、その点はいかがでしょうか。

T: 時間数削減の中で、「読むこと」の基礎とは何なのかを考え続けています。国語として豊かに読むということ考えたとき、読み取るだけでなく、読み浸るとか、読み味わうという経験を持っていない子どもは読書の世界に行つたつて、やっぱりそれは楽しめない。とすれば、その読み浸ること、読み味わうことも基礎・基本なのだというところをどうしていかないとだめなんじゃないかと思えます。

S: 読むことで、自分の気持ちを言葉で表現する力が培われていきますからね。例えば、小さいときから夜寝る前にい



くのです。「最初に、おばあさんとマサエの会話が出てきます。中は、おみつさんのお話です。実はおばあさんでした。はい、おしまい。」というふうにストーリーを追つただけではまだ読んだということにはならないと思えます。言葉で表現する力も育ちません。

T: 文章の構成を教えるために、「わらぐつの中の神様」を使えば、そうなつてしまつ。だから、何を字ばせるために何を使つたつてというのが大切になってくると思つたですよね。「読むこと」にも軽重をつけたり、読み方を変えたりすることが必要なんではないですかね。その目安の一つにはやっぱり目の前の子どもの実態でしょう。子どもの国語の力をどれくらい教師がかんているかが鍵になりますね。それとも一つは、この教材の特徴は何かがよく分かっていることですよね。べたつと全部同じ調子でやらなきゃいけないと思つと、結局蛇蜂取らすになる。教師も子どもも完全燃焼できないということになりかねないですから。

M: 先日、ある先生と「読むこと」で何を教えずにはならないかを話したのですが、結局「絞る」ことではないのでしょうか。国語でなければできない「読むこと」はこれだつていろいろを考えて内容を絞り込む。そのうえで、一年ではこれ、二年ではこれというふうにちゃんと

積み上げていかないとね。例えば、この教材を七時間で教えたいというとき、二時間を思い出しや「読むこと」以外の指導に使わなきゃいけないとしたら、ほんとに読み取る大事な時間は四時間しかなくなってしまう。

T: だから、その中で教えていくとしたら、過去にとらわれないで、日々研究し、同僚と学びあって教えていかなければならないと思う。

M: そういつなかで、教科書は重要ですよ。てびきがその手がかりになると思います。「こは」「読み」の力をつけるためにこの作品を使う。だから、こつこつ言葉の力を意識しよう、とこつこつな指示があったり、こころではゆつくりみんなで読み浸るこつこつと呼びかけがあったり、そのへんがきちつと示されているといいですよ。

T: それが見える教科書とこつこつなら安心だと思います。「みなさんどうでもお使いください。」「こつこつこつこつやっぱりしんどい。特にこの時代、先生たちが、じっくりと考えて選択して、軽重を考えて使っていくゆとりが現場にはありません。

今大切なことは

M: 先ほど、豊かな言語生活というお話が出ましたが、子どもたちに「伝え合える言葉の力」を、ということが今求められていますよね。伝わればいいというだけでな

かったのではないかと思います。

S: いろいろなことに対して、情報公開も含めてオープンになって、みんながいろんなことを言っていることは確かにありますよね。

T: だからこそ混沌(こんとん)なんだけれど、こつこつだ！ っていう声に、ただついて行って、どこに連れて行かれるか分からないというよりは、いろいろな人がいるんなところに興味をもったり、これでいいのかなと思ったりしている方がいいのではないかと思います。そのうち淘汰(たうた)されますよ。そして、それは子どもが示してくれると思います、十年かかるかもしれないけれど。

M: そう、やっぱりこつこつは子どもが示してくれるということですね。あともう一つは、先ほどもありましたけれど、読み込むことも、読み浸ることも、読み取ることも、国語の基礎なんだと考えることです。ただ字面を読むことが基礎じゃないよっていうふうにはちゃんと明確にしていけないとだめだと思います。それは言い続けていくしかないと思います。

S: わたしの学校の地域では図書館スタッフという制度が事業化されていて、週二日ですが、その日はスタッフが必ず図書室にいます。たったそれだけで子どもたちは天地の差です。

くて、伝えるんだっいたらより美しい日本語で伝えてほしいとわたしは思います。今、わたしは六十六歳の先生に英語を習っていますが、「語学はね、日本語が基本なの。学校の先生たちには豊かで美しい日本語を子どもたちにもたせて欲しいと願うのよ。それができないと国際的にもいい会話はできない。Stop here. と言つてのよ、Would you stop here? と言つてのよでは全然違つてしょ。」「普段美しい日本語を話してなければ、豊かな対話も何もできないでしょ。」「こつこつもおっしゃるのね。わたしもほんこつこつこつだと思えます。

S: そういつの意味でも、一に国語、二に国語。ほかの教科にも全部関係してくることですから。国語を正確に読み取る力がなければ、算数の応用問題もできない。理科も読み取れない。社会科の文章も分からないということになります。

T: それに対する特効薬はないですよ。もともと国語というより教育つていうのは、こつこつ積み重ねることに尽きます。今わたしたち教師は、社会的にも、矢面に立たされている感じがあつて、かなり負担感があると思います。でも、わたしはあんまり悲観することはないと思つています。「こつこつまで、親も含めて社会のみんなが、教科書とか教育の中身に目を向けている時代はなかなか

M: 四月二十三日の「読書の日」もできましたね。ですから読書はかなりの後押しが期待できる。社会状況としても、読書に返るといふ傾向があると思つています。

T: そうですね。朝の十分間読書といった運動もかなり大きく動いています。

S: 荒れた学校も朝の読書をするとうちが本場に変わります。

「読むこと」から始まる、ということ、教科書も責任重大というところですね。今日はお忙しいところありがとうございます。ありがとうございました。

